各時代の代表的な文学作品と歴史的背景

３年　Ｂ組　１７番　　出石　美波

目次

１研究の動機
２研究方法
３研究結果　　大和・奈良時代
　　平安時代
　　鎌倉・室町時代
　　江戸時代
　　明治・大正時代
　　昭和・平成時代
４考察
５感想
６参考文献

I wondered how the literary works change with the times. So I decided to examine the representative literary works in each time and their historical background.
The way I studied was by using reference materials of history and handbook for Japanese. I came to the conclusion that they related with “progress of technique” and “the way of thinking of people”.

１研究の動機

私は、現代に残っている昔の文学作品がどのように変化してきたのかについて興味をもった。そこで、歴史の動きや出来事と強い関係があるのではないかと思い、歴史と関連させて調べてみたいと思った。

２研究方法

歴史の資料集で歴史的な出来事について調べた。また、国語便覧を使って代表的な文学作品について調べた。

３研究結果

大和・奈良時代

大和朝廷によって国家が成立した四世紀ごろから、平安京に都が移る八世紀末までの期間。遣隋使遣唐使など通じて中国から国を治める制度を学び、聖徳太子の改革や大化の改新を経て、律令制が整えられていった。また、仏教書や漢籍（中国の書物）などから大陸文化を吸収した。

＜文学の流れ＞

文字のない時代、人々は祝詞や古代歌謡、神話、伝説などを口から口へと語り伝えた。→口承文学
四～五世紀ごろ、大陸から漢字が伝わったことにより、漢字を用いて表記されるようになる。その

後、大陸から伝わった漢字の音と日本読みの訓を合わせ、仮名のように用いた「万葉仮名」が発明され、漢字は広く使われるようになる。この時代の代表的な文学作品には、「古事記」「日本書紀」「万葉集」などがある。

＜古事記＞

天地の初めから推古天皇にいたるまでの、わが国の神話、伝説、歌謡、歴史を記録した、現存する最古の書物。内容は、天皇家を中心とする国家統一を主題とした歴史書で、天の岩戸ごもり、因幡の白兎など、様々な物語が展開される。

＜万葉集＞

奈良時代後期に大伴家持によって成立した現存する最古の歌集。奈良時代中期までに作られた歌、約４５００首が収められている。全２０巻。天皇から一般の民衆まで、幅広い階級の人々の素朴な感情が力強くいきいきとうたわれる。歌風は「ますらをぶり」といわれる。

・万葉仮名

当時、まだ平仮名や片仮名はなく、文章も全部漢字で書かれていた。日本固有の言葉を表すのにに、漢字の音や訓を借用する方法が考えられた。これを万葉仮名という。

（音の借用）安良礼（あられ）美夜故（みやこ）

（訓の借用）名津蚊為（懐し）鴨（かも助動詞）

・戯書

読み方の面白いもの

蜂音（ぶ蜂の羽音から）牛鳴（む牛の鳴き声から）十六（しし四×四で十六）

八十一（くく九×九で八十一）山上復有山（いで山のうえにまた山あり出）

平安時代

都が平安京に移ってから、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの約４００年間。藤原氏を中心とする王朝貴族が政治の実権を握り、貴族文化が栄えた。また、仮名文字の発達により宮廷女流文化が花開いた。

〈文学の流れ〉

平安初期は大陸文化の影響が強く、漢詩文が盛んにつくられた。しかし、遣唐使の廃止と仮名文字の発達とともに、唐詩に対して和歌（やまとうた）を大切にする風潮が生まれる。（国風文化の誕生）六歌仙の活躍で和歌が再び盛んになり、９０５年に最初の勅撰和歌集「古今和歌集」が紀貫之らによって編集された。技巧を凝らした優美な歌が好まれ、以後多くの歌人が活躍し和歌が隆盛した。また、仮名の発達により宮廷女流文学が盛んになる。女房として仕えた貴族の子女の中から宮廷生活の見聞をつづり物語を創作する優れた文学者が現れる。随筆「枕草子」を書いた清少納言と、長編物語「源氏物語」を書いた紫式部の二人が代表的で、世界的な古典として高く評価されている。また日記文学も多く書かれた。

＜枕草子＞

長短約３００段の文章からなり、清少納言が宮仕えをしていたころ見聞きしたことや、季節の感想、人生観などを書き記している。作者である清少納言は、幼いころから和歌や漢詩文に親しみ豊かな教養を身につけていた。みずみずしい感覚で鋭く観察した簡潔な文体、表現の中に、作者の豊かな知識と才気がうかがわれる。また、作品中「をかし」という言葉が多く用いられることから、「をかし（明るく軽やかな感動）」の文学といわれる。

＜源氏物語＞

華やかな貴族社会を背景に、紫式部が創作した長編物語で「もののあはれ（しみじみとした感動）」の文学といわれる。作者である紫式部は、幼いときから聡明で和歌や漢詩文に優れていた。天皇の第二皇子である光源氏の恋愛・栄華・苦悩の生涯と、実らぬ恋を描き、人間の真実の姿を追求した。

・「あはれ」と「をかし」はともに平安時代を代表する文学理念である。

鎌倉・室町時代

源頼朝が鎌倉に幕府を開いた十二世紀末から、徳川家康が江戸に幕府を開くまでの約４００年間。武士が政治経済上の実権を握った時代で、全国に戦乱が絶えなかった。不安定な世の中を反映して無常観が人々の心に根付く一方、民衆の文化が育っていった。平安末期から鎌倉中期にかけて、次々と新しい仏教が生まれ、心の支えを求める人々に幅広く浸透していった。

<文学の流れ>

相次ぐ戦乱、度重なる地震や辻風に飢餓。「この世ははかないもの」という無常観が人々の心に植え付けられ、文学にも大きな影響を及ぼした。仏教の無常観をもとに武士の姿を描いた軍記物語が大きな特色である。代表的な作品には、「新古今和歌集」「方丈記」「平家物語」「徒然草」などがある。

＜平家物語＞

源氏と平家の戦いを中心に、平家一門の盛衰を描いた軍記物語。作品全体を仏教的無常観が貫き琵琶法師による語り物として広く民衆に親しまれた　文体は和漢混合文で独特のリズムがある。全二十巻。

・内容　展開

平家一門の約５０年にわたる興亡の歴史を、源氏との抗争を中心に、移り変わる社会の動きや武士の姿、女性や幼い子供の悲運などをおりまぜて描き、はかなくも壮大な人間ドラマとなっている。

　平家の栄華→源氏の挙兵→義仲の活躍→義経の戦い→平家の滅亡、

＜徒然草＞

序段と長短二四三段からなる中世を代表する兼好法師の随筆集。自然や人間、社会、芸能など幅広い話題を取り上げ、自由な立場で感想、意見、批評を書きつづったもの。作者である兼好法師は、広い教養を身につけた当時の代表的知識人であった。

＜方丈記＞

鴨長明の６０歳頃の作品。混乱した世の中のありさまや、出家の身としての生活、心境、人生観をつづる。無常観が全体に色濃くただよっている。

江戸時代

徳川家康が江戸に幕府を開いた十七世紀初めから、徳川慶喜が大政奉還をして幕府が倒れるまでの約２６０年間。封建体制が確立して世の中は安定し、商工業の発達にともない、町人が経済上の実権を握った。木版印刷の発達などもあり、町人文化が栄えた。

・出版文化　　木版印刷の発達により本屋が誕生。絵草子などの出版で繁盛した。

＜文学の流れ＞

（前期）　元禄の頃上方（京都・大阪）を中心に文学が発達した。俳諧は松尾芭蕉によって芸術性豊かな文芸に高められ、小説では町人の生活を題材に井原西鶴がかいた浮世草子が流行した。

（後期）　文化の中心は次第に江戸に移っていた。芭蕉の没後衰えていた俳諧は、与謝蕪村によって復興され、小林一茶も活躍。川柳や狂歌も庶民の間で流行した。小説では、上田秋成・滝沢馬琴らの読本、十返舎一九・式亭三馬らの滑稽本などが人気を得た。

学問では、儒学、国学、蘭学などが盛んになった。

＜紀行文　おくのほそ道＞

松尾芭蕉が門人曾良を連れ、江戸から奥羽・北陸をへて大垣（岐阜県）にいたるまでの５ヶ月をこえる旅の紀行文。名句をちりばめている。旅に出たときの芭蕉は４６歳で、持病もかかえており、死をも覚悟の旅だった。行く先々で美しい自然や人々に触れ、敬愛する古人（西行、李白、宗祇）をしのび、優れた句がたくさんうまれた。

作者である松尾芭蕉は、若いころに松永貞徳の貞門派俳諧を学び、その後江戸で西山宗因の談林派俳諧に親しむ。しかし通俗的な俳風に満足できず、純粋な文学、新しい芸術としての俳諧を追求する。各地を歩き、旅を通して人生を見つめ、「蕉風」と呼ばれる芸術性の高い独自の俳風を確立した。根本精神は「さび」で、物静かで心がすみきった閑寂の境地のこと。

・特色

「おくのほそ道」の特徴は虚構性（つくりごと）と推敲の多さである。たとえば、「平泉」の経堂と光堂の内部を見たように書いているが、曾良の日記には実際には経堂は開かれなかったと書かれている。体験した事実だけではなく、文学的な創作をまじえた紀行文である。

明治・大正時代

明治維新から大正時代の終わりまでを近世という。社会が急激に変化し、文学も西欧の様々な影響を受け、写実主義の作品が発表された。明治維新後期からは、自然主義、反自然主義、白樺派や新現実主義など、多様化する。

＜文学の流れ＞

江戸時代から受け継がれた戯作文学が中心だった明治初めに、福沢諭吉が西欧の思想や文化を紹介した。やがて自由民権運動が高まり、政治小説が流行した。

この時代の有名な作品は、「学問のすすめ（福沢諭吉）」「吾輩は猫である・坊ちゃん（夏目漱石）」「羅生門（芥川龍之介）」「注文の多い料理店（宮沢賢治）」「伊豆の踊り子（川端康成）」など。

昭和・平成時代

社会不安が続く中、プロレタリア文学から昭和の文学が始まった。表現の自由を抑圧した戦争が終わると、新しい時代に向けて文学作品は盛んになった。人々の価値観が多様化し、主流となる文学思潮は存在せず、文学も多様化している。

＜文学の流れ＞

第一次世界大戦後、世界的な不況がおこり社会不安が高まったことで、労働運動が盛んになった。そして、文学によって政治や社会の矛盾と正面から対決しようとするプロレタリア文学が生まれた。その後、軍国化が進み、プロレタリア文学への弾圧は激しくなり、作家たちは転向文学とよばれる作品を書くようになった。また、太平洋戦争が進行するにつれ、芸術・表現活動自体が重い制約を受けるようになった。戦争が終わると、文学活動は再び盛んになった。これまでの道徳に反抗し、戦後のすさんだ退廃の中に人間性の回復を求めた無頼派とよばれるものが発表された。その後、切実な戦争体験を踏まえ、人間の存在の意味を深く追求した戦後派とよばれるものが人々の共感を得た。

この時代の有名な作品には、「蟹工船（小林多喜二）」「走れメロス（太宰治）」などがある。

＜近代文学の背景＞

文学が多様化した明治から現在までの近代文学には、様々な背景があった。

・明治　　明治政府による富国強兵政策→産業の近代化、欧米の文化の取り入れ

・大正　　大正デモクラシー→民主主義の広まり

生活の近代化（ガス、水道、電車、自動車などの発達）

・昭和初期　　世界恐慌→大不況による経済的な大打撃　軍隊の強力化→戦争

・戦時中　　太平洋戦争→苦しい生活

・昭和後期　　戦争からの復興、高度経済成長

４考察

この研究を通して、文学は昔から歴史と深くかかわりあってきたのだと考えた。特に、「技術の発達」と「人々の考え方」に大きな影響を受けていると思う。中でも、文学作品が作られ始めた奈良時代から、江戸時代までは印刷技術・出版技術の発達などが大きく影響し、ある程度技術が発達した明治時代以降は、人々の心情や考え方が主に影響したのではないかと考えられる。そして、その背景には、太平洋戦争などの戦乱や戦争、自然災害などによる社会の乱れがあると思う。これらから、良くない

出来事が起こったとき、人々の心の支えとして多く書かれてきたのだということが考えられる。また、文学作品などの思想の変化が、社会の発展による人々の変化と共通していたことから、文学はその当時の人々の生活を最もよくあらわしているものだといえる。そして、今の私たちもそうであるように、文章を書くということは、どの時代の人々にとっても自分の考えを発信し、共有していくという意味で欠かせないことだといえると思う。

5 感想

今回この研究をしたことで、今まで別々に勉強してきた「歴史」と「国語」のかかわりが感じられた。そして、長い年月の間人の心と密接にかかわりあってきたのだと思った。また、どの時代の人も文学というものに支えられてきたのだろうと思った。だから自分ももっと本を大切にしていきたいと思う。調べていく中で大変だったのは、自分が思っていたほど細かい資料は残っていないことだ。もし機会があればもっと資料がないか調べてみたい。

6 参考文献

「新国語便覧」　秀学社